同和問題の学びの始まり

長崎に生まれて

　みなさんにとって人権学習と言えば何を思い出すでしょうか。

　私の中の人権学習と言えば小学生の時からずっと原爆がテーマでした。長崎は世界で二つだけの被爆地です。毎年8月9日になると夏休み中の登校日に被爆者の方から「戦争のことや被爆したことで差別を受けた話など、思い出したくない出来事だけど、二度と同じような体験をしてほしくないから…。」と体験談を聞いていました。そして、被爆地をめぐり友人たちと原爆について当たり前のように話をして育ってきました。被爆者の方からすれば思い出したくない体験を私たちに伝え続けている姿やその想いを知り、私は伝え続けることの大切さを理解していきました。

祖父との話

　私の祖父は被爆者です。私は帰省する際に、実家よりも先に祖父たちの家に帰るようなじいちゃんばあちゃんっ子でしたので、小さい頃からよく話をしていました。祖父とお風呂に入っている時、すねのあたりに大きい傷の跡があるのを見て尋ねたことがありました。その時の祖父は「昔のけがだよ。」とだけ言い、それ以上のことは聞けませんでした。後で祖父のいないときに、祖母から戦争のときのやけどの跡と聞きました。

　最近、祖父の法事に親戚が集まった際に、祖父の姉から「じいちゃんから戦争の話を聞いたことあるね。」と聞かれました。その時にお風呂での会話を思い出しました。祖父が被爆者であることは知っていましたが、祖父から原爆の体験を聞いたことがないことに初めて気づきました。祖父の姉の「思い出したくなかったんだろうね。」と言った言葉に、祖父の苦しみが想像でき、今でも心に残っています。

　そして、当事者が伝えることが本当に大事なことなのか、当事者だけが頑張ることなのかと疑問を感じるようになっていきました。

福岡で就職をして

　就職して同和問題について学ぶ機会に触れました。今まで人権問題と言えば原爆がテーマだった私にとって全く知らないことだらけでした。

　そのような中、今から5年ほど前に同和地区のAさんと直接関わる機会がありましたが、初めて会った時は多少の緊張感があったように記憶しています。

　Aさんとの直接の関わりは2年弱でしたが、家庭訪問や市役所で会った時は、いつも気さくに話をしてもらいました。時には私の仕事を心配してくれるなど、いつの間にか当初感じていた緊張感はなくなり、会うと元気をもらっていました。

　最近になって偶然市役所でAさんと会い、「久しぶり。元気にしてる？たまには遊びにおいで。」と声をかけてもらいました。

　私は5年以上も前の関わりを今でも覚えてもらえていたことに驚き、それが嬉しくもありあたたかい気持ちになりました。

これまでの出会いから気づかされたこと

　そんなAさんとの交流をふりかえるたび、私は「なんで最初あんなふうに緊張していたんだろう。」と考えるようになっていきました。

　そして、同和問題のことを正しく《知らない》ために、いつのまにか私の中で同和地区の人たちに対する間違った認識を抱いていたのだと考えるようになりました。また、その気づきを通して、私は被爆者に対する決めつけも、人と人とのつながりを阻害していることに気づくことができました。

　今になって祖父との会話を思い出すと、きっと祖父にも思い返したくない苦しい体験があったのではないかと思います。そして、それを家族にも誰にも言わせないようにしたものが、差別的な社会の側にあったのではないかと思うようになりました。

　だからこそ、これから大切にしなければならないのは、被爆者や同和地区出身ではない私たちこそ、主体性をもって学び続けていくことだと考えています。

　私にはまだ知らないことが多く、学び始めているところです。これからAさんの家を訪ね、祖父の原爆の話や同和問題について話をさせてもらい、学びのきっかけにしたいと思います。